

この度、「第二期法華經写本シリーズ」ともいうべきプロジェクトの編纂と発刊の業務が東洋哲学研究所に委嘱された。このプロジェクトに参加し、前回の写本シリーズ五の『東京大学総合図書館所蔵梵文法華經写本 (No. 414) ローマ字版』を世に送り出した筆者は、感謝と感激でいっぱいである。

二〇〇六年度から五年間で、

- ① 英国・アイルランド王立アジア協会所蔵写本 No. 6 ローマ字版
- ② パリ・アジア協会所蔵写本 No. 2 ローマ字版
- ③ 大英図書館所蔵写本写真版 Or. 2204
- ④ 大英図書館所蔵写本 Or. 2204 ローマ字版
- ⑤ ケンブリッジ大学図書館所蔵写本 Add. 1684 ローマ字版

と、梵文法華經写本研究にとって逸することのできない写本が採り上げられている。①は、いわゆる「ケルン・南條本」の底本であり、②は、ビュルヌフの仏語訳の底本であり、③④は、貝葉写本のひとつの系統の読みを代表する写本であり、

「第二期法華經写本シリーズ」の出發を祝う

小槻晴明

⑤は、「ケルン・南條本」の校合とケルンの英語訳に使用された写本である。

今回さらに重要なことは、ネパール系の貝葉写本・紙写本の系統を明確にすることである。これによって、「ネパール系梵文法華經写本校訂本」ともいべきテキスト作成への具体的な筋道が示されることになる。これは、戸田宏文先生が生前懐かれていた独創的な構想であり、それをローマ字版テキストの形態で、日本のみならず世界の研究者に発信できることは、筆者にとっても大きな喜びである。これを土台に、写本研究のさらなる発展を願うとともに、筆者もたゆまず研究を続ける決意である。

戸田宏文先生の学恩を偲びつつ、
誓い戸の 田に散る桜 ひろわんと 法華の文に
寿量(いのちはか)りて

ご逝去の翌年の二〇〇四年四月、自著を福岡県筑紫野市のご自宅にお届けした帰路に詠む。

(こつき はるあき／東洋哲学研究所委嘱研究員)